

# 子供を守る新しい予防接種 (Hib・肺炎球菌ワクチン)

細菌性髄膜炎(さいきんせいずいまくえん)は、b型インフルエンザ菌(=Hib菌。インフルエンザウイルスとは無関係)、肺炎球菌、髄膜炎菌などの細菌によって引き起こされる子供に多い感染症です。初期症状が発熱、嘔吐、痙攣など風邪に似ているために診断が難しく、また進行が早いため、治療が遅れると、死亡したり(5%)、てんかん、難聴、発育障害などの後遺症が残る場合(20%)があります。

2008年の感染症発生動向調査\*によると、全国で病原体の届出があった患者のうち、原因菌の数としてはHib菌が最も多く、次いで肺炎球菌となっています。

県内の細菌性髄膜炎の発生動向をみると、2007年から患者数が増加し始め、2009年も増加傾向が続いており、全国と比べても多いといえます(図1)。年齢階級別割合では、0~4歳までの子供が全体の74.8%を占めています(図2)。

子供の感染を予防するには、予防接種が有効です。米国ではHibワクチン、肺炎球菌ワクチンが定期接種として既に導入され、子供における細菌性髄膜炎の発生件数が大きく減少したとされています。日本でもHibワクチン(2008年12月)、肺炎球菌ワクチン(2009年10月)が認可され、生後2ヶ月以降の子供に対して予防接種(任意接種・有料)可能となり、細菌性髄膜炎が予防ができるようになりました。お子さんにHibワクチン、肺炎球菌ワクチンの予防接種を希望される方は、かかりつけの医師にご相談の上、接種するとよいでしょう。

予防接種の年齢スケジュールは次のとおりです。

<http://idsc.nih.gov/jp/vaccine/dschedule/Imm10-01JP.pdf>

\*感染症発生動向調査・・・感染症法に規定された疾患の患者がどのくらい報告されたかを調査集計したものです。 【企画管理班】

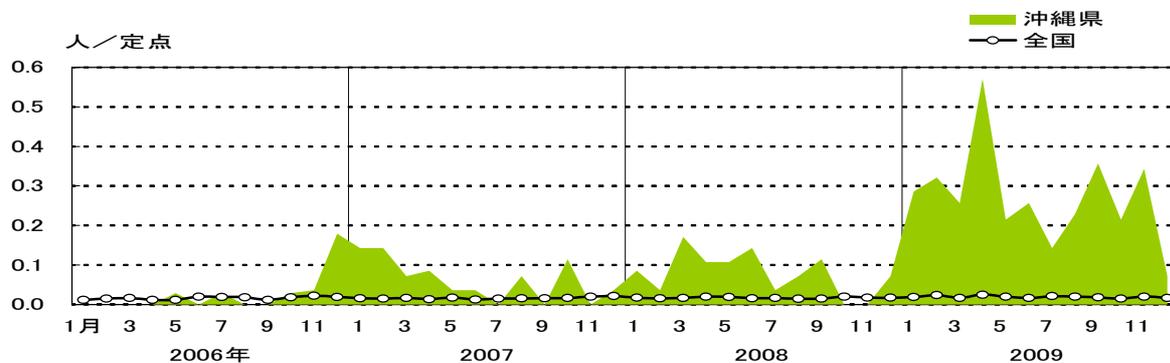


図1. 細菌性髄膜炎の患者報告数 (2006~2009年12月末現在)

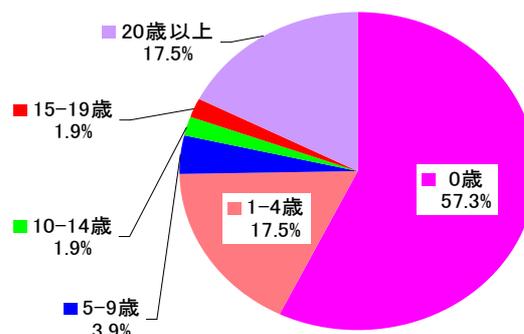


図2. 細菌性髄膜炎の年齢階級別割合 (沖縄県: 2009年12月末現在)

## Hibワクチンの接種スケジュール

- ① **接種開始月齢** ・ ・ 生後2ヶ月以上7ヶ月未満（初回免疫3回＋追加免疫1回：計4回）
  - ・ 初回免疫：4－8週間の間隔で3回  
（医師が必要と判断した場合には3週間の間隔で接種することができる）
  - ・ 追加免疫：初回免疫終了後、おおむね1年の間隔をおいて1回
  
- ② **接種開始月齢** ・ ・ 生後7ヶ月以上1歳未満（初回免疫2回＋追加免疫1回：計3回）
  - ・ 初回免疫：4－8週間の間隔で2回  
（医師が必要と判断した場合には3週間の間隔で接種することができる）
  - ・ 追加免疫：初回免疫終了後、おおむね1年の間隔をおいて1回
  
- ③ **接種開始月齢** ・ ・ 1歳以上5歳未満（1回免疫）1回接種



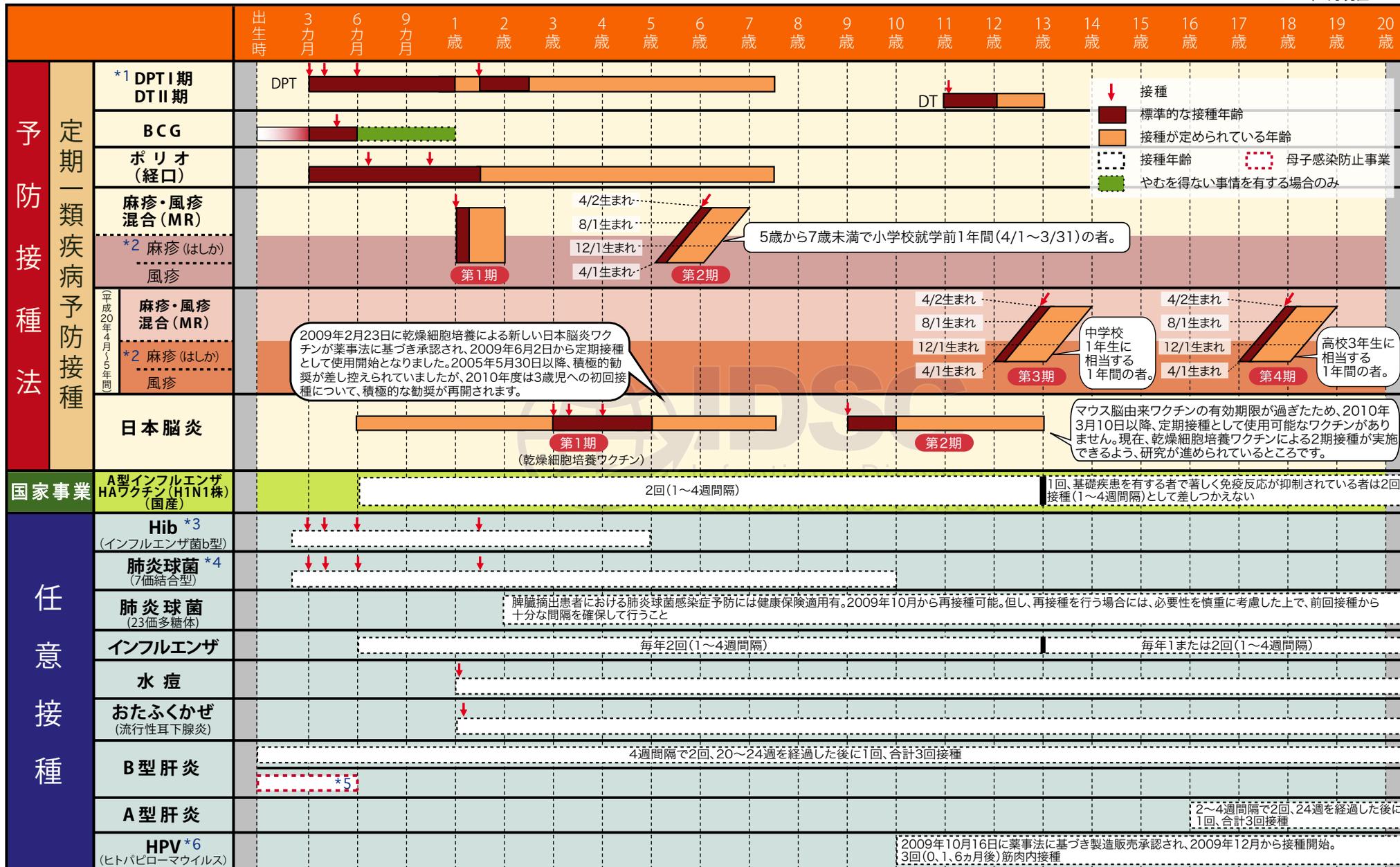
もっと詳しく知りたい方は・・・

※ 最近の発生状況（県内）

URL: <http://www.idsc-okinawa.jp/houkokusu/kansen2010HTML/80.html>

※ 細菌性髄膜炎 国立感染症研究所感染症情報センター（感染症の話）

URL: [http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k03/k03\\_38.html](http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k03/k03_38.html)



\*1 D:ジフテリア、P:百日咳、T:破傷風を表す。  
 \*2 原則としてMRワクチンを接種。なお、同じ期内で麻疹ワクチンまたは風疹ワクチンのいずれか一方を受けた者、あるいは特に単抗原ワクチンの接種を希望する者は単抗原ワクチンを接種。  
 \*3 2008年12月19日から国内での接種開始。生後2か月以上5歳未満の間にある者に行うが、標準として生後2か月以上7か月未満で接種を開始すること。接種方法は、通常、4～8週間の間隔で3回皮下接種(医師が必要と認めた場合には3週間間隔で接種可能)、3回目の接種後おおむね1年の間隔をおいて、1回皮下接種。接種開始が生後7か月以上12か月未満の場合は、通常、4～8週間の間隔で2回皮下接種(医師が必要と認めた場合には3週間間隔で接種可能)。2回目の接種後おおむね1年の間隔をおいて、1回皮下接種。接種開始が1歳以上5歳未満の場合、通常、1回皮下接種。  
 \*4 2009年10月16日に薬事法に基づき製造販売承認され、2010年2月24日から国内での接種開始。生後2か月以上7か月未満で開始し、27日間以上の間隔で3回接種。追加免疫は通常、生後12～15か月に1回接種の合計4回接種。接種もれ者には、次のようなスケジュールで接種。生後7か月以上12か月未満の場合：27日以上の間隔で2回接種したのち、60日間以上あけて追加接種を1歳以降に1回接種。1歳：60日間以上の間隔で2回接種。2歳以上9歳以下：1回接種。  
 \*5 妊娠中に検査を行い、HBs抗原陽性(HBe抗原陽性、陰性の両方とも)の母親からの出生児は、出生後できるだけ早期及び、生後2か月にHB免疫グロブリン(HBIG)を接種。ただし、HBe抗原陰性の母親から生まれた児の場合は2回目のHBIGを省略しても良い。更に生後2,3,5か月にHBワクチンを接種する。生後6か月後にHBs抗原及び抗体検査を行い必要に応じて任意の追加接種を行う(健康保険適用)。  
 \*6 HPV16型・18型(子宮頸癌予防)。日本産科婦人科学会、日本小児科学会、日本婦人科腫瘍学会連名の「ヒトパピローマウイルス(HPV)ワクチン接種の普及に関するステートメント」(平成21年10月16日付)によると、推奨される年齢は、以下の通りとなっています。「優先的接種推奨年齢：11～14歳の女子。11～14歳で受けることができなかった場合の接種推奨年齢：15歳～45歳の女性。」  
 © Copyright 2010 IDSC All Rights Reserved. 無断転載・改編を禁ずる。